

AA 研共同利用・共同研究課題「アフリカ農業・農村社会史の再構築：在来農業革命の視点から」2020年度第2回研究会（通算第4回目）

日時：2021年3月28日（日）13:00-17:00

場所：AA研301セミナー室 および ZOOM

出席者（対面）：石川博樹、山口哲由

出席者（オンライン）：鶴田 格、杉村和彦、松田正彦、池上甲一、末原達郎、坂梨健太、安溪貴子、小松かおり、藤本武、加藤珠比、田中耕司、泉 直亮

発表1：山口哲由（京都大学）

「チベットにおける農牧の概要と近年の変化」

標高 2,500m 以上の環境のなかで培われてきたチベットにおける農業の特徴を確認するとともに、その形態が近年の状況下でどのような変容をしてきたのかを論じた。チベットは東西 2,000km、南北 1,000km におよぶ広大な地域であり、多様な農業が実践されているが、その農業様式の地理的な分布を理解するうえで重要な要素の一つが「乾燥」である。チベットにおける降水量は北部・西部にいくほど減少するため、これらの地域では専門的な牧畜が展開されるが、一方で比較的降水量が多い南部・東部では農耕の比率が高くなる。また、「標高」も重要な要素であり、森林限界である標高 4000m を超える高山ステップは牧畜に適しているが、河川によって刻まれる標高差を伴う溪谷では、標高が高い部分で牧畜、標高が低い部分で農耕がおこなわれ、さらにこれらの農耕と牧畜が飼料と肥料を介して有機的に結びつく半農半牧の農業が実践されてきた。このように標高差によって生じる環境の違いに応じた作物栽培や家畜飼養がおこなわれ、それらの生産活動が世帯や集落を単位として統合される形態は、チベットにおける一つの典型的な農業様式とされてきた（combined mountain agriculture）。しかし、近年はその様式にも変化が生じており、山地社会でも道路開発が進むにつれて商品経済が浸透し、各標高帯での生産活動が直接的に市場と結びつくことによって、標高帯間の結びつき衰退し始めている。こういった変化は、標高帯ごとの環境でなにが生産できるのかによって、経済的な格差を生じさせつつあり、さらには、経済的な影響だけではなく、溪谷単位で成立してきた山地社会の有り様にも影響を与えつつある。

発表2：泉 直亮（目白大学）

「東アフリカ牧畜社会における財の蓄積と家族：富豪世帯を形成する社会的なしくみとその意義」

本発表では、東アフリカ牧畜社会における財としての家畜の蓄積について、それを所有、管理する家族集団の形成に注目して議論した。このテーマに関する人類学、とくに経済人類学的な先行研究では、1970年代から新古典派経済学による市場経済の分析モデルを牧畜社会にも適応できるという議論が展開されてきた。それによると、牧畜民にとって家畜は貨幣・資本であり、牧畜社会の経済は資本主義と同質であるという。また、すべての家族が、家畜群と家族集団を拡大させ、あくなき成長をめざして競合する「家族ビジネス (family business)」に邁進する「家族企業体 (family enterprise)」であると理解されてきた。

発表者が、タンザニアにおける牧畜民スクマ社会の事例から「家族企業体」について再考した結果、上記とは異なる理解が得られた。スクマの人びとは、東アフリカのなかでも大きな家族集団で他に類をみない頭数のウシを所有することから、一見すると「家族企業体」の議論と整合性があるようにも思われる。しかしながら、スクマ社会には、富のある（多くのウシをもつ）世帯に多くの成員が集まる傾向にあり、経済格差が生まれやすいしくみがあった。すなわち、親族・姻族関係にある世帯間の成員の移動に着目すると、富者が優先して、他の世帯から成員を引き取っていた。また、すべての世帯が富豪をめざすわけではなく、意図的に成員を減らして富豪への道を閉ざすものもいた。そして、このように「社会的に作り出された」富者が、社会的なセーフティネットとしての役割も担っていることが明らかになった。

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.